

## よくある御質問(技能実習計画の認定申請関係)

No.	質問内容	回答
○ 申請手続に関するもの		
1-1	第2号技能実習を2年間行う計画で申請し機構から認定を受けた後に、地方入国管理局に在留資格の変更申請をしたところ技能実習生に対し許可された在留期間は1年間でした。その場合、2年目の在留期間更新申請時に、改めて機構において計画の認定を受ける必要がありますか。	技能実習計画は各号ごとに認定を受けるので、2年間の第2号技能実習を計画し、その認定を受けた場合には、2年目の在留期間更新申請時に改めて機構において計画認定を受ける必要はありません。
1-2	監理団体の許可を受けた後でなければ、団体監理型技能実習の計画認定申請を行えないのでしょうか。	団体監理型技能実習の計画認定申請を行う場合には、その実習監理を行う監理団体が監理団体の許可を受けていることが必須です。 なお、新制度への移行期においては、監理団体の許可申請及び技能実習計画の認定申請とも、施行日前の事前申請を受け付ける予定であり、監理団体が許可を受けていなくても、団体監理型技能実習の計画認定申請を行うことは可能です。 この場合において、監理団体の許可申請及び技能実習計画の認定申請とも、施行日以降の結果通知となるため、仮に監理団体が許可を受けられなかった場合には、同監理団体の監理を受けて、実施予定であった技能実習計画についても、認定されることはありません。
1-3	本社の住所地は東京都内ですが、全国的に工場や支社を持っており、その東京都以外の住所地にある工場のみで技能実習生を受け入れる場合、技能実習計画認定の申請先はどちらになりますか。	技能実習を行わせようとする申請者が法人の場合は、その本社の住所地を担当する機構の地方事務所・支所に申請することとなりますので、申請先は、本社の住所地を担当する機構の東京事務所となります。
1-4	現在、第1号技能実習を行っていますが、第2号技能実習を開始する予定は平成30年2月1日からです。その第1号技能実習生の在留期限も、同年2月1日です。この場合で、第2号技能実習を行おうとするときは、新制度の手続により、技能実習計画の認定申請を行い認定を受ける必要がありますか。	新制度の手続により、技能実習計画の認定申請を行い認定を受け、在留資格の変更許可を受ける必要があります。 なお、ご質問のあった以外の技能実習生の在留期限が平成30年1月31日までである事例については、現行制度の手続を受けることが可能となります。 詳しくは、「新たな外国人技能実習制度について」の20頁「技能実習法の施行に伴う旧制度から新制度への移行について」をご覧ください。
1-5	技能実習計画の認定申請の際に、技能実習生となる外国人を決定していなければなりませんか。	技能実習生について、技能実習計画の認定を受けるための基準が定められていることから、技能実習計画の認定申請をする際には、技能実習生となる外国人が特定されていることが必要です。
1-6	技能実習法の施行日前に地方入国管理局で申請が受理された「技能実習2号」から「技能実習2号」への実習先変更の在留資格変更許可申請で、仮に、同施行日に処分が終わらなかった場合は、新制度の規定が適用されるのでしょうか。	技能実習法の施行日前に地方入国管理局へ実習先変更の在留資格変更許可申請がなされた場合には、原則として、同施行日前に地方入国管理局から処分を行うことを想定しています。同施行日までに処分が終わらなかった場合の経過措置は設けられていませんので、十分な時間的な余裕を持って地方入国管理局に申請を行うことが必要となります。

## よくある御質問(技能実習計画の認定申請関係)

No.	質問内容	回答
○ 技能実習計画の記載事項に関するもの		
2-1	技能実習計画の認定申請の際、監理団体の許可番号や許可の別などを記載する必要があるところ、法施行前の技能実習計画認定申請事前受付において、監理団体の許可が下りていない場合にはどのように記載すればよいのでしょうか。	新制度への移行期において、監理団体の許可申請中の段階で技能実習計画の認定申請を行う場合には、監理団体の許可に係る <b>申請時に交付された申請受理票に記載されている受理番号(例:許17〇〇〇〇〇〇〇〇)</b> を記載してください。
2-2	参考様式第1-1号の「申請者の概要書」の⑪労働保険番号は、基幹番号のみ記載すればよいのでしょうか。それとも、都道府県番号から全て記載するのでしょうか。	都道府県番号から全て記載願います。
○ 技能実習計画の添付書類に関するもの		
3-1	技能実習計画の認定申請は、技能実習生一人一人について行うことが求められているが、共通の添付書類については、省略できないのでしょうか。	同時に二以上の申請書等を提出する場合、重複する添付書類の省略を可能としています。(規則第69条第1項)
New ! 3-2	役員の住民票の写しの提出を求められていますが、役員的人数が多く、全員分の住民票の写しを入手することが困難です。何か、他の書類で代替することはできませんか。	住民票の写しを提出して頂くことが原則ですが、技能実習に関する業務の執行に直接的に関与しない役員に関しては、住民票の写しに代えて、誓約書(技能実習に関する業務の執行に直接的に関与しない旨と法令に定められている欠格事由に該当する者ではない旨について申請者が確認し、誓約したもの。機構様式参照。)の提出で代替可能であるという取扱いとします。ただし、誓約書を提出した役員が、その後の調査において、実際は技能実習に関する業務の執行に直接的に関与していたことが判明した場合や、欠格事由に該当していたことが判明した場合には、技能実習計画の認定の取消し等がなされることとなりますので御注意願います。また、個別の審査の過程において、追加で住民票の写しの提出をお願いする場合があります。
New ! 3-3	技能実習計画の添付書類として、「監理団体と申請者の間の実習監理に係る契約の契約書又はこれに代わる書類の写し」が求められていますが(規則第8条第9号)、契約書でない場合にどのような書類であれば認められるのでしょうか。	監理団体と申請者(=実習実施者)の間の実習監理に係る契約書に代わる書類として、監理団体(組合)と実習実施者(組合員)との関係を規定している書類、具体的には、監理団体(組合)が定めた技能実習に関する事業に係る規約と、当該規約に実習実施者が組合員として服することが分かる書類を提出して頂くことが可能です。
○ 技能実習計画の認定基準(介護)に関するもの		
4-1	介護職種での受入れを考えています。技能実習計画の認定を受けるための要件はどうなりますか。	現在、厚生労働省(社会・援護局)において検討を進めているところです。最新の情報は、厚生労働省HP(外国人技能実習制度への介護職種の追加について、 <a href="http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000147660.html">http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000147660.html</a> )を御確認下さい。

## よくある御質問(技能実習計画の認定申請関係)

No.	質問内容	回答
<b>○ 技能実習の内容に関するもの</b>		
5-1	規則第10条第2項第3号ホの「団体監理型技能実習に従事することを必要とする特別な事情があること」に関し、「技能実習制度 運用要領」51ページの②において、「教育機関の形態は問いませんが、教育を受けた期間については6か月以上であることが必要」とあるところ、この「教育機関」とはどのようなものが該当するのでしょうか。 また、期間が6か月以上であれば、どのようなものでも該当するのですか。	ご質問のありました「教育機関」とは、同要領64ページにある「外国の教育機関」と同義ではなく、その国又は地域における学校教育制度に照らして正規の教育機関として認定されているものである等の特段の要件がある訳ではありません。 しかしながら、教育期間が6か月以上であれば、どのようなものでも該当するというわけではなく、少なくとも教育機関における教育の内容が技能実習を行わせようとする職種・作業に関連する教育課程と認めるに足りる内容となっていることが求められます。
5-2	技能実習法第9条第1号にある「本国」とは、具体的にはどの国が該当するのでしょうか。	具体的には、技能実習生の「国籍又は住所を有する国又は地域」が該当します。
<b>○ 技能実習の体制に関するもの</b>		
6-1	技能実習責任者は、同一の実習実施場所において複数選任しても良いのでしょうか。	それぞれが当該事業所における技能実習の全体について連帯して責任を負うことができるのであれば、複数名選任することも排除されてはいません。
6-2 <small>(一部修正)</small>	技能実習責任者、技能実習指導員及び生活指導員を兼任することは可能ですか。	技能実習責任者、技能実習指導員及び生活指導員は、各々に求められる要件を備えた上であれば、兼務することは可能です。
<b>○ 第3号技能実習の内容に関するもの</b>		
7-1	第3号技能実習については、第2号技能実習を修了後、1か月以上帰国しなければならなくなっていますが、第2号技能実習を修了して帰国した場合は、その後、何年以内なら第3号技能実習に進めるのでしょうか。	第2号技能実習の修了から第3号技能実習の開始までの帰国期間に上限はありません。 ただし、帰国後相当な期間が経っているのに、その間に技能実習で身に付けた技能等を全く活用していないというような場合には、帰国後の業務従事予定(規則10条2項3号ハ)の信用性等に疑義が生じることもあり得るので、技能実習生の選定に当たって留意していただく必要があります。